



9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4

多忙を終
あわせ
著

記



よひのるはやちりすみの
まかさまとえあらうせみの
うぢのくもく、くわくらきそ
雨の夜をも詠ねにされめり
つくれしれりさしたよ
かんきのあたがくまのむらもが
歌よみのよこちまともれくもが
よも思ひよろけゆふれ
てまくとくの月に見えぬふえ



却もいとぞと思ひをなめんまこと
そ枝をちぢめぬる所へともみゆく
がよがよがよみやかにすむれあ
かがわもすみに思ひわらへし
まわらわもすみに思ひわらへし
やよもすみに思ひわらへし
まよもすみに思ひわらへし
えよもすみに思ひわらへし
清のよみにア角もすみに思ひわらへし

そもそもあめのふもとやう一ツ
ふもとまくらうふもとやう一ツ
どうもくらうふもとやう五すくは
肩りよづよがく室ひてたゞみせおう
ひくはあむらよあめよとよ節
をよれよれよれよれよれよれよれ
おも正山すもとやうれよれよれよれ
の屋ハタみあた思ひよれてき角川

中
の
月
は
か
く
て
古
野
を
見
る
か
よ
に
た
ん
こ
と
う
だ
ら
の
な
と
の
初
生
れ
松
の
佐
久
里
竹
の
竹
の
名
を
角
の
房
月
は
か
く
て
古
野
を
見
る
か
よ
に
た
ん
こ
と
う
だ
ら
の
な
と
の
初
生
れ
松
の
佐
久
里
竹
の
竹
の
名
を
角
の
房
月
は
か
く
て
古
野
を
見
る
か
よ
に
た
ん
こ
と
う
だ
ら
の
な
と
の
初
生
れ
松
の
佐
久
里
竹
の
竹
の
名
を
角
の
房

うくまめに柳よ
をまきあつて、
さむかわそみや
ちくのまくわく
まきさけまかめ
日ひ神め
いからみてみか
はせと迎
ほづてがふり
ほづてがふり
の書せらうす
の書せらうす

あち角をとるはまよ店の種事と
ちあてあが柳の手すりにねりみの
計ちうやうやう形うどうち
みくわやぬこのかくひだるえ、ア
要えは生うたかくま日暮

文子楊志

الله رب العالمين، رب العرش العظيم، رب الارض والسماء

والسماء، رب كل الارض، رب كل السماء، رب كل الماء

والسماء، رب كل الماء، رب كل السماء، رب كل الارض

والسماء، رب كل السماء، رب كل الماء، رب كل الارض

والسماء، رب كل الارض، رب كل السماء، رب كل الماء

والسماء، رب كل الماء، رب كل السماء، رب كل الارض

والسماء، رب كل الارض، رب كل السماء، رب كل الماء

والسماء، رب كل الماء، رب كل السماء، رب كل الارض

والسماء، رب كل الارض، رب كل السماء، رب كل الماء

والسماء، رب كل الماء، رب كل السماء، رب كل الارض

والسماء، رب كل الارض، رب كل السماء، رب كل الماء

卷之三

九例

○高尾考ハ明和の頃原富翁古老人の傳及自の記憶を以て筆記され
一で初めあり、又其又作者不知物二三本ほど今好事の人寫へ傳へ珍重
せり、天明より享和迄至ア何某のくしへの先生前の高尾考を原モト
古書を引校正ありし本より今又是と増補せんをものぞむとやんあらぐ
予が友もふ竹本氏豊芥子とば、カ三亭子その他モ吉原の古書を多く
藏せり人あや其うちふ先達の眼ふあきよとせがふ物もぞくあら
ゆび前書ふまれるを書加へくいの——川

○代々の高尾のあやゆき或ひ出生の地或ひ其身のゆことあい等の事ハ前書及
それまきの雜書少く見えれど其説區々て愚意ふ是非を定め難け
きがゆりく省き唯年表年立などは物の如く代々のをぞめの見安からん
事のことを要とす

首二

高尾の傳ハ行先生古書ハ更多り生産の地小傳——古老人の茶話ナド周ぢ
ぐすもとあられずもと他の眼をもさう奇本あつと兼て聞く彼書斐市
のときと俟是ふ照して見ゆるべく誤りもあく適考(得)功も顯れ
老木の柳も思ひばらう綠の春ふあれもせん歟

○古書とゞ悉ハ取難一其故如何ともあきべ寛文三年の吉原伊勢物語ハ
箕山が大鑑より引新町をも男と同本多く元禄の幕揃の延寶の芥川モ
是のとくべ原来一時の戯を草紙をとす体形改められ、年号と削りたるハ
入木考るも見ゆ、角捨れてハ抄出考れど誤りも多きべ

○万治より元禄五年の間字が意を用ひ前書ふえじる事もなへあれど
寶永より末ひゆくか先達の説と改めどあくと記へたる

干時天保辛丑子月念八日

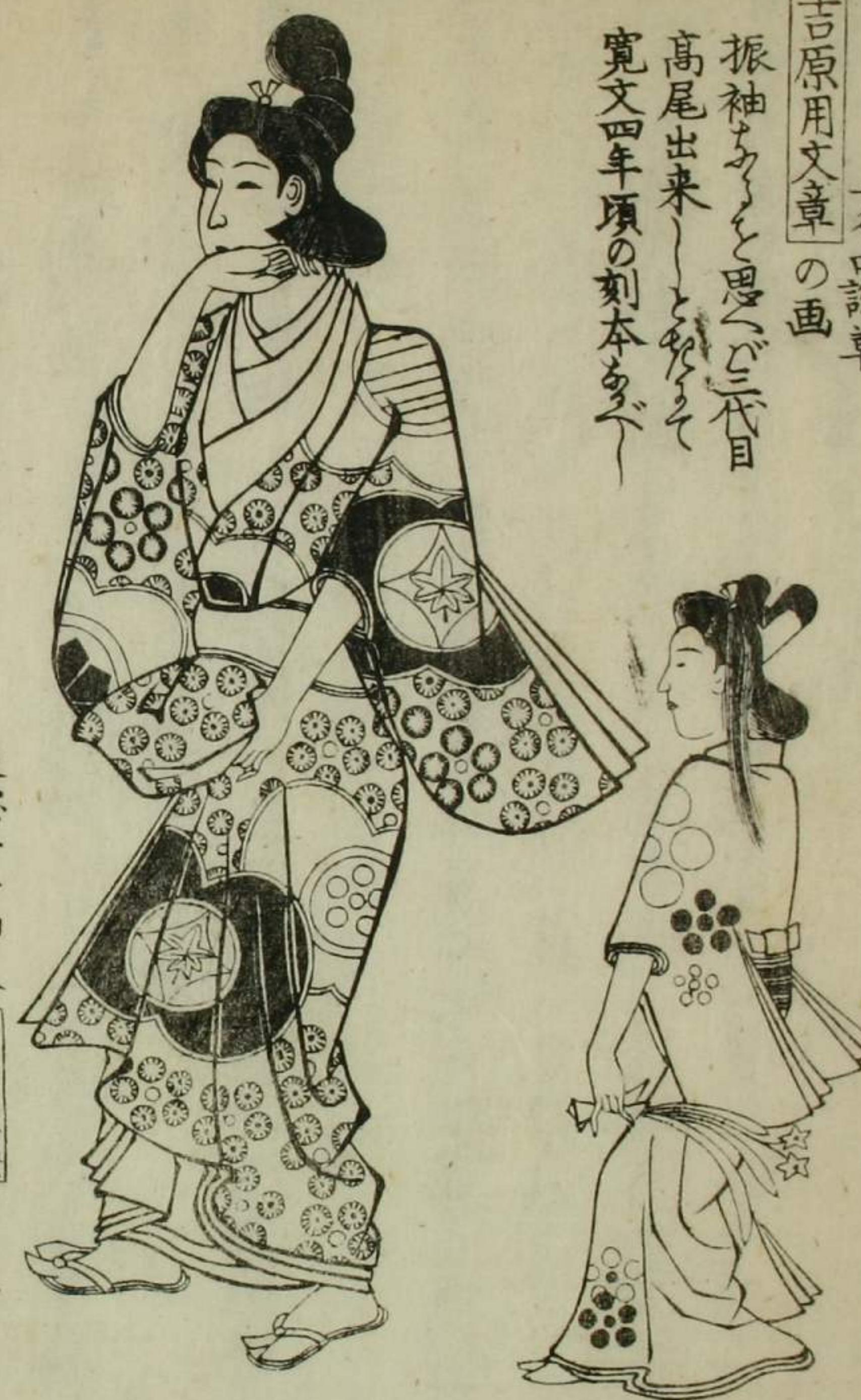
雪閑戸

修紫樓上 柳翁記

吉原用文章の画

一名口説草

振袖あらと思へ三代目
高尾出来りとぞ
寛文四年頃の刻本を

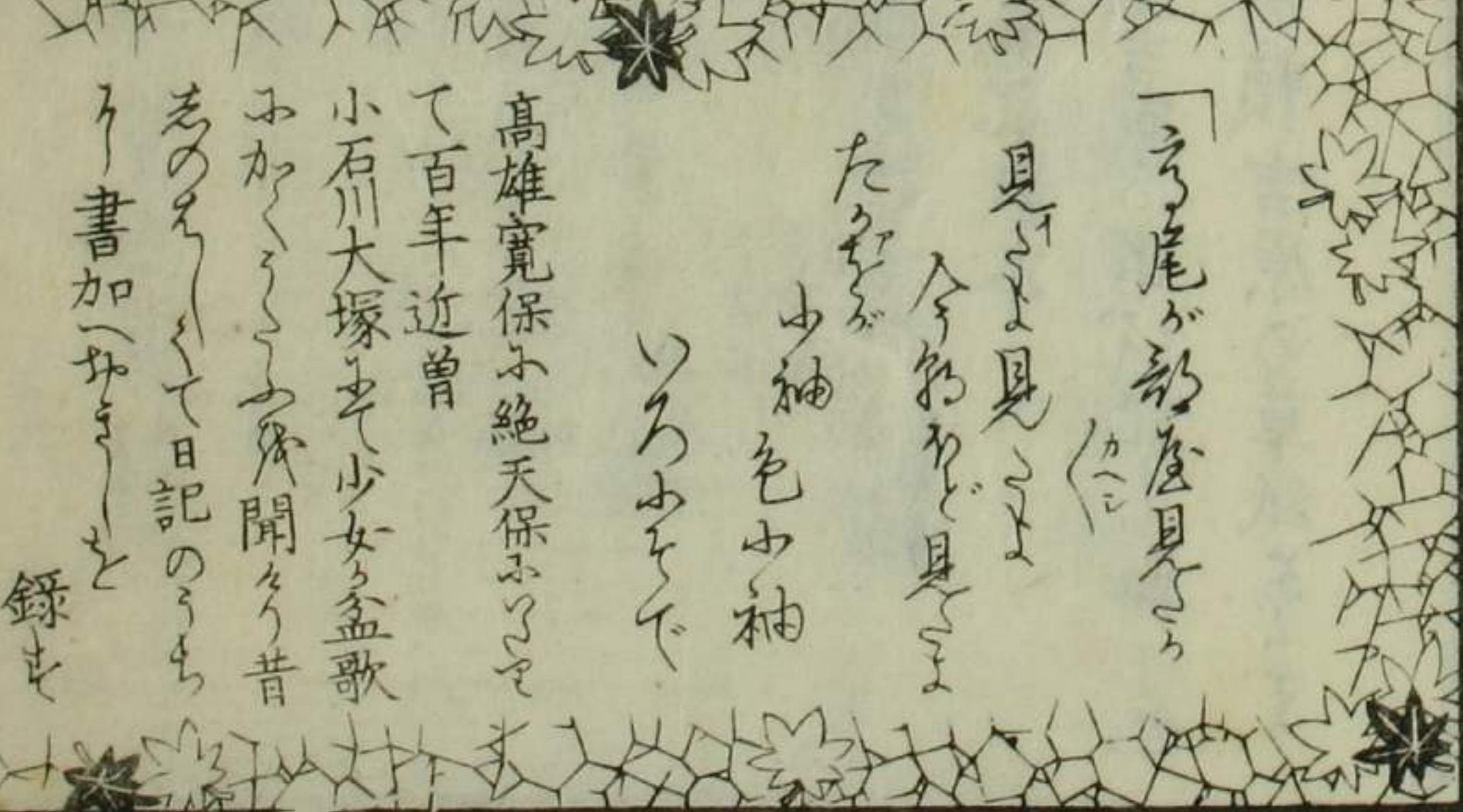


延宝二年印本吉原失墜の引書ふ
くせう草とあるハ此用文章の事也



右下摸へる吉原六方あり予が前著へ用捨箱子に
如く寛文中の草紙あられど用文章とハ画風りく
異なり

此高尾の前小新町りうをん内せんむあらきて同内と記
一これば當時の高尾ハやうをんの家ふあをし歎かう者世ふ



高雄寛保ふ絶天保ふつて百年近曾
小石川大塚モ少女孟歌
ふかくうふく聞う昔
ものも（くて日記のうち
ノ書加（やま）と
録も

引書目錄

前高尾考引きより省く
吾妻物語袖鑑ハ異本も故不載

- 吉原六方 寛文
吉原鑑 万治三年
吉原失墜 延宝二年
吉原つみく草 元禄二年
吉原伊勢物語 寛文二年
吉原大雜書 延宝三年
吉原つみく草 寶永三年
吉原用文章 寛文
吉原根元記 寛文六年
吉原讚嘲記 寛文七年
吉原呼子鳥 寛文八年
吉原下職原 天和元年
吉原買物調 天和二年
吉原大豆俵 天和三年
吉原見物左門 元文三年
櫻うらら 享保十九年
繫情菖蒲草 正徳六年
山茶胡桃頭巾 延宝八年
吉原見物左門 元文三年
細見記數本

此餘画本鯉の鉤針俳諧是天道花見車の類吉原の草紙あるも
ハ茲小不載

諸先生高雄考集覽

一名

高尾年代記

種彥補綴

初代高尾未詳事

寛永九年開版吾妻物語

元吉原遊女の名寄後代の細見記の類あり序小
鳥の花のとある處よりかかれてはるる等の
文をもて草紙まで來園して埋木の花をもあく一枝、
ひづれにかくらん事と進むてこそ行御と申す。ひづれ十九
年古郷の名をよひたれど思ひたての旅衣足あらゆく程小
武花の園花の如きあればと云ふてひづれと打めて吉原よ趣
まへて游女のもと記す也。草紙翌年再度末を彌改するにて三
本が見よ齊かず其異同下辨をとて抄出する十九年の彌之
本が見よ齊かず其異同下辨をとて抄出する十九年の彌之



此草紙の板元ハニッ槁
と名のり京二条通烏
丸之昔ハ江戸より草
稿をのげせ彼地にて
製本すもゆのや
画ハ京人の多き見る歟

せりふん内 そし いちよすたりと あえん さ月
まつりの内 そし もりんたりを あやいへた やるまき
たんてたのも あけ まえん

京町

わらうらう内 そし すのうせたんあも ひくと たりと ださう
せきうちあせきみや あみのきみゆうす まのゆ
すをうち内 そし あと あきみゆうじ あとめもじうせ
さきみゆうすのうせひくと そりへ たりと

當時さん茶あじよのひあく格子うり一段をだまきを端とりよされぬ
翼うきとの名四人あれども太夫みくろを見えど
。巻中の画、高雄の事あらまじひど漸々小画風のかたすくもを
これ見ゆ人の目さす一草ふ筆のつゞくよ摸りそり

宗町

卷之三

一多町のひきうど 十九戻
一多町のひきうど 十七戻 中の町あけや 十四人
一多町のひきうど 七戻 一新町のあけや 九人
一新町のひきうど 大二万 一新町のあけや 九人
一多町のひきうど 三十万 二町めのうあけやハ八人
三町めのうあけや 三十九万 三十九万あけや 三十九万
一町めのうあけや 三十九万あけや 三十九万
一町めのうあけや 三十九万あけや 三十九万
一町めのうあけや 三十九万あけや 三十九万

寛永十九年

六月吉日

清兵衛開板

如此卷尾ふあて後半摺たる本當此半葉無シ五葉を全
寛永廿年ふ廿六丁廿七丁ニ葉を膨添廿二丁由三行入木して脱
一多町めのうあけや 三十九万あけや 三十九万
一多町めのうあけや 三十九万あけや 三十九万
一多町めのうあけや 三十九万あけや 三十九万

高尾二

の増補の廿六葉小

「この十六人ふたゆよたじも金きうさり」と記す十六人の名ふもとに

宗田

西多内

屋

十六

居手とすゆくはつまんとおひまよおひま

井のじるそくま

二

たす

十

たうと屋すまゆのあしのそく

ゆめもいくよのぬゑくらん

寛永二十年

六月吉日

とあれども是と初代と定めがて 按ふまに九月と記すも
草稿と京(せき)で刺成(さしこ)とまの月と書く事あるべく其故
尙寛永廿年同九月此より作者吉原(よしはら)行彼(こうひ)の

太夫(たゆ)
高尾(たかお)
名(な)

見ゆ

太夫と遊び方事記。画と半葉加へる本より又高尾無し。

あざす男りど思ひをとせんとはあくろのやうすむらんくゆきの事
あると寛永廿年まゝ月をも全あてたる事一とよとせんくひう
二とせんくひうの事一とせんくひうの事一とせんくひう
や思ひをとせんくひうの事一とせんくひうの事一とせんくひう
や人のゆきとあらざれば中畠の事もあらざらずとせんくひう
をもう手とせんくひうとせんくひうとせんくひうとせんくひう

京町

前後略文

四多羅内 やまと のまき

前の十六人の太夫の名と此十八人を合せ見ると大同小異あり前より
四郎左衛門内やまとと記してゐる。またのまきと曰ふと高尾野沢と改
名する。身うけとまれる年は僅十五と同年の名を見まつて初代

高尾三

正保

四年續

慶安

四年續

承應

三年續

明暦

三年續

とひひひぐれど太夫小高尾の名當時より既よあ
此正保より明暦小至る十五年の間次あるハ寛永十九年の前より
名の聞え。高尾の事。事ハ袖鑑アシカイ小万治高尾と二代と定め
下職原小古高尾と記してあるが知れど考證冊子を未見

二代目

万治高尾又号妙身高尾

吉原
三谷

万治元

東海道名所記

叢端江戸の事とて條小三、若のうち廿九人の計ま

あち中す。萬雄。かく勝。ちをとく。張臂ナガヒのものに

梓刻の年号ありとども万治元年の作ある事五の卷五丁小証あ
て其後つゝく増補ぞうほにて見えて是二代目の萬雄あり

初葉小如此あり
以下、此草紙をもと摸もくと
考證するもとあるも

吉原かく勝の口承

三

二

太夫称わざり

かじりわづく ▲ い下れ名ハシなかじ

以下畧

ソラキ

風儀

箇中

ソラキ

ソラキ

箇中

九

あ月

ちか 三浦内

或人のいのく月ある男そやくおでぬよりぞりん
あうと見ていかけのせのうく鞠のいぢり是をといひて
こひた鞠とひだれ新内も嘗まあり、はくすくすく
嘗念するもあくよたゞそのでくけのあうとも
月のあもあごくべくかとありと、さうてわれとくゞじ
鞠のいぢりあむるにうき行けりかとアヌえくう月の
こひた鞠とひだれとけのせのよみくらかみとあくせ
よみてより色くけてみくらくすみと底又けのせの
鞠をくらうとくかまてあきてつこまるなどすハきく全れ
うふくらくとけのせのよみくらかみとあくせハ

柳翁曰此草紙ハ今之細見記の
如く中小路を庵びて向側ハ逆
どく用なれバ摸さず
如比太夫の他▲格子ト高尾入
阿モ此後ハ三浦屋の太夫一人の
名ふ定され其叟寛文七年
の條すゞく記を照一合せ
見きべ

高尾四

柳翁

格子す。ちよ。名づく。吉原町の圖自初丁至八丁。高雄の太夫の弟也。

高尾五



万治三年九月十六日
新板

此草紙小新新できをま名づけと記し近曾の太夫の部九人名をまと
を別と出し今まで傳きるに太夫の姿画廿八人卷頭此高雄
あり前々年東海道名所記小第一小川高雄と同名を事明之

諸此高尾の墓三ヶ所没年す先達の説まことにて愚意よ
定め難いむづかしい大概を記して後人の明談を俟

○誰々も知り如く三谷手下みや弘願寺せんがん稱院西方寺おうがくじ俗ぞく道搭どうぱの高
尾の墓ハ法号轉譽妙身信女 万治三庚子年十二月廿晉

寒風さむかぜともろくも立たる頃ころふれ

と辭世の勺スプーンと周まわてあり

○又一ツの墓ハ三谷寺町春慶院

法号為轉譽妙身也 万治二己亥年十二月五日

辭世の勺スプーン前より或先生見出されてより今ハ略人やくじんも知る
めり先生此墓を實じつ西方寺の墓ハ高尾たかおが事こと
繰くわくモト土佐とさ掾いんが淨瑠璃じゆり二河ふたご白道しらみちをもとまきてより偽いつ
作つくせりものあらわしと記され又或翁の説小春慶院の墓
ハ西方寺の墓より新らしく見ゆ是ハ高尾たかおが由縁ゆゑんの者歟或ハ
高尾たかおの役を勤いたかずまの女方めんがをより者の後年小建こしん物
ゆゑ名年と二年日と廿日と誤ちがひかずま為轉譽妙身也まへと
葬くわ所ところ及び供養塔くぎやくとうの証あてありと云いハ姑よ此説この隨つづ之の一い万治
二年十二月没しのぶる高尾たかおが万治三年九月刊行の吉原鑑よしはら小入いり
えれす此草紙出来なま冬没しのぶと見るが穩のぶやあん

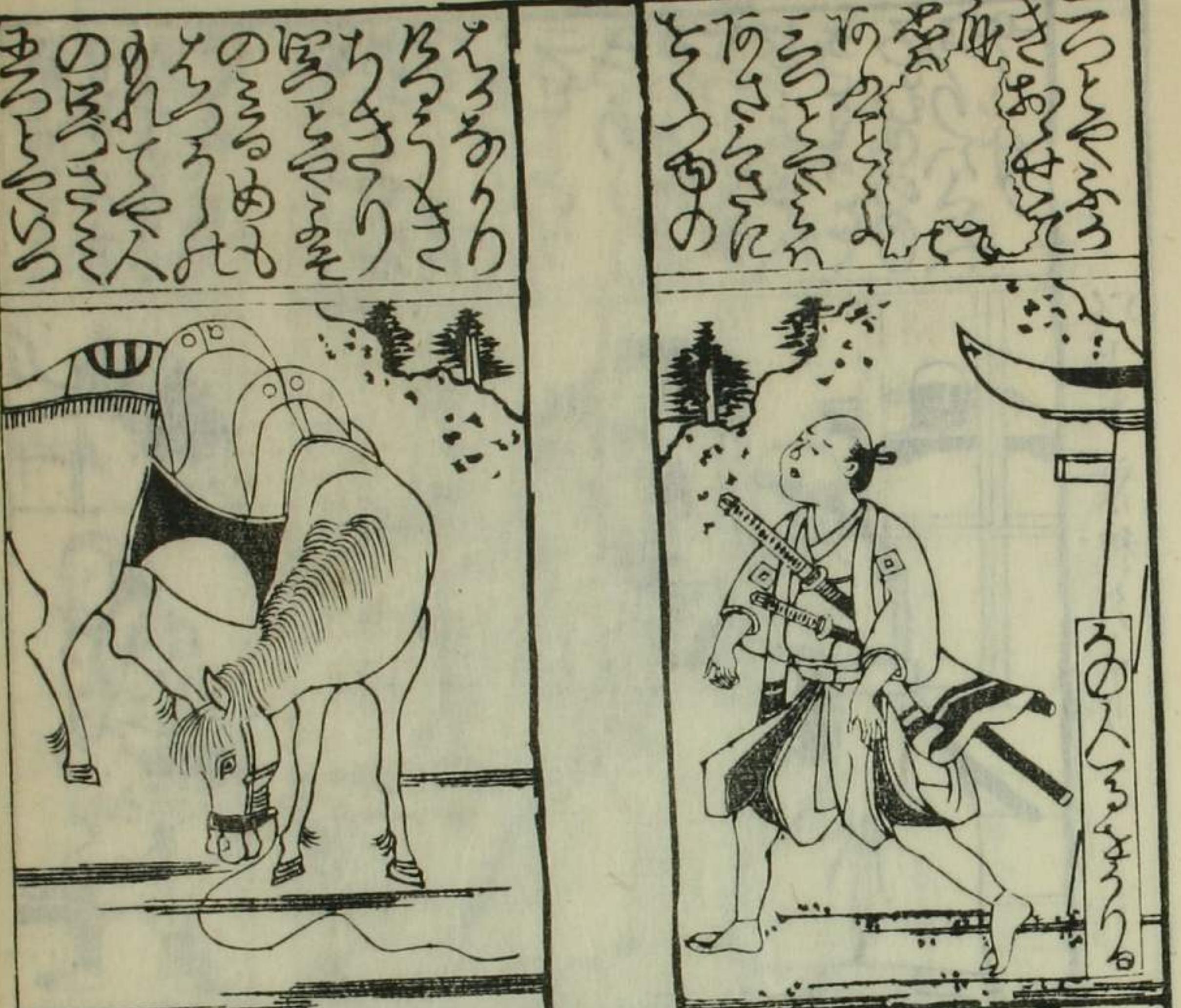
京町うきよ物内

高尾物語



○此万治三年より廿九年
の後印行考る [言廉子
四年名木の部小
真享
する尾の紅葉
新宿村にえ院とふ
津古寺みをみる
を糸三浦四郎左衛
くもうのそりき本
ひする更ありよ治と
佐健行成りゆくよ
一く三十で度もすた
とを方ふらうとせきと遙

高尾七



あらわしふねとすてぬ
よねされ万治をばつ
こさすやぬのうめ
今之光院の客殿の
左の方ゆ裡て侍養妙
心と改名しておきわと
のまへよ經事とてと
うな舟きぬ物へかす
のかとさかの太本と
あやめ秋の夜ハ好古の書
ハ金本とすきとてをもと
更懐春とすと興とす

按小此年間ト高尾の出来一々見テ其事下に見テア
開板吉原根元記 ふ三代目高雄の姿画あて左ふ摸モ

此高尾物語小身請の事あり弘願山の伝より高尾身請せられ此寺門の前まで來テとぎに没シ故小身葬シテ。按もす後年まで妙身高尾といひ傳へば思バテよし如花街と出程多く死す。此万治三年より九年の後刊行の讃嘲記ふ遇り三九物轉譽すが墓又「吾常を物道哲がぞうと音」であるが見せば高尾の墓此西方寺ふ古すわきにやうにやう

以下半葉程久ナリ

高尾ハ



○上小模一さるハ此高尾病死の刻の辻賣の草紙俗下賣あり此歌と見量高尾小さだ男のうりすあれども作りとして人の浮名うるあるが讀賣のうりあれば是と証といひかかべ

とねと墓ハ無キかよひ
かう此所下す葬れ
よ一ノ記も此正光院の
事ハ諸先生の説あつま
未尋

柳翁昇前
下京町三郎
左門内外記
あをゆ多子
同町上者
今之高尾と
きて、巻頭
ふわびあう
ひこうあり

今
日
同
町
の
事
業
は
何
事
業
か
と
考
え
て
お
る
よ
う

トトロ
トトロ
トトロ
トトロ
トトロ
トトロ
トトロ
トトロ
トトロ
トトロ

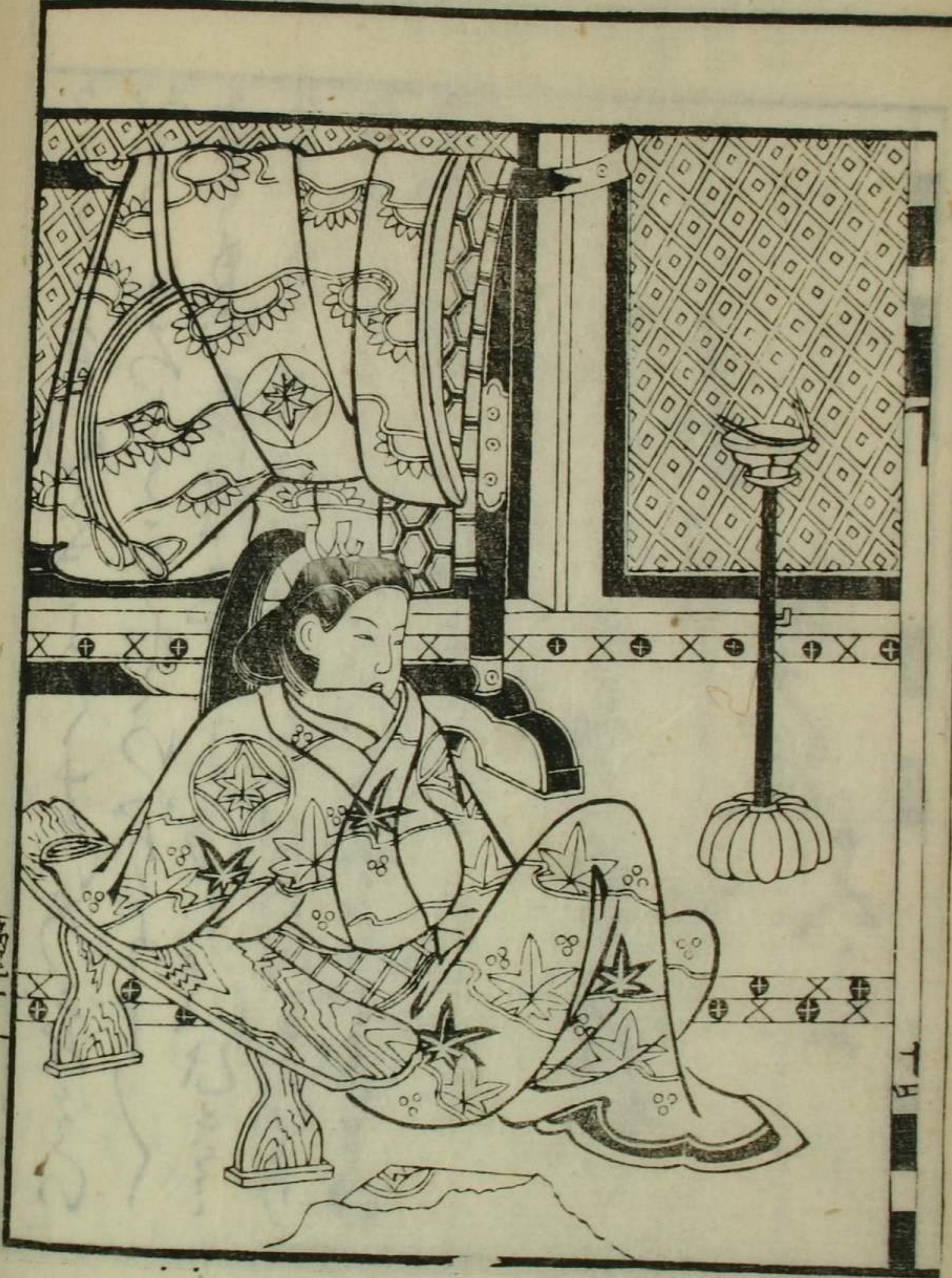


たうと ふうもり

まくはりの内

袖うみよ曰太丈四天王の第一ウタ多門天の位あすあすあひあう
 り略中志まきんじゆふくうぬ林トミあれぐむせりびーてひまとも
 めあうあめあめびなぐううきをひきをひきをひきをひきをひきをひ
 どこうあう略中志まきんじゆふくうぬ林トミあれぐむせりびーてひまとも

此根元記次小錄もる讚嘲記袖鑑の三種ハ一端寫本にて流
 布一其後小添削し刻一も物あらが故是の彼書をそ
 して彼書より此冊子を難ドられ前成し書する事詳
 すゞ此所より予が見する刻本の順小記を是より以下ハ摘要の
 略文等あるがゆゑすゞ摸一ふあらば此三種の草紙不図
大全とい書未見



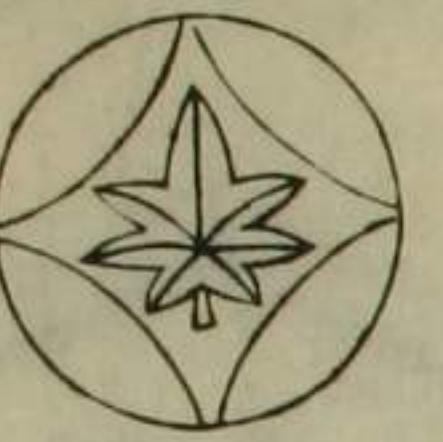
は町小住で久しかればかあび色黒を保ると云根元記小曰あゝの間で
りそくはがみ花のつまじ妙あるをすほ如くもとう筆で白墨あらえよ
の時ふるの筆もかきすねがこまへーと云此後問答とやたばらされば
せ君十四五もあらびづきし理すゑて一中略今まうを今年へせうと
せばゆ寒のやつまじ全寒の花の時あれがいとくそよのよきと見
ん略或人の口せじ去年の春の頃より今へがんせうてとあすとひと
まんあとよまのとまと花とやぶ名のとまを秋のよきとじと

同書のをゑ犬枕の条「あひとまの とまをたんまうだま跡
柳翁曰年立ととげきてこに見ゆまへ心見ふ十六よりの勤とす
るとき此高尾寛文三年ふ出来ー

ちたひ又前の吉原鑑ふ見まう格子高尾の事を記す變を
別ふやうけへ混雜せんを思ひてあわて

同シ寛文七年印本吉原鑑小女郎小名號つる東とひと条小
「まの付くるハ其ノ名をすどもあめぐくやむれ
あお名號すとおまくすばく思ひくふすくのあく中略同シ
名と付くふれの失ありてよもよの名號すとおじてとまじ
事とま二つ大差あとのとれとびふ名とすちがひきびのじ
き事あり二つもと其名とすす所の名とすくよび又同シ
町あれが名號つるてりすとほじとす西と全寒あるをすと
格子とよどめのよもよの名號あきバ必わが名號もじゆるもの
あや。太る尾を太くといふが下略大高尾とよびれーと
前の吉原鑑ふ見まう格子二入の高尾あごー三代高尾ハ號名
すまうあくとそれすまうで金盛とよせられど他の家と高
尾あまく全二代目高尾の餘光とひと

老
孫
神
妙
見



かきよ

多
少
の
事

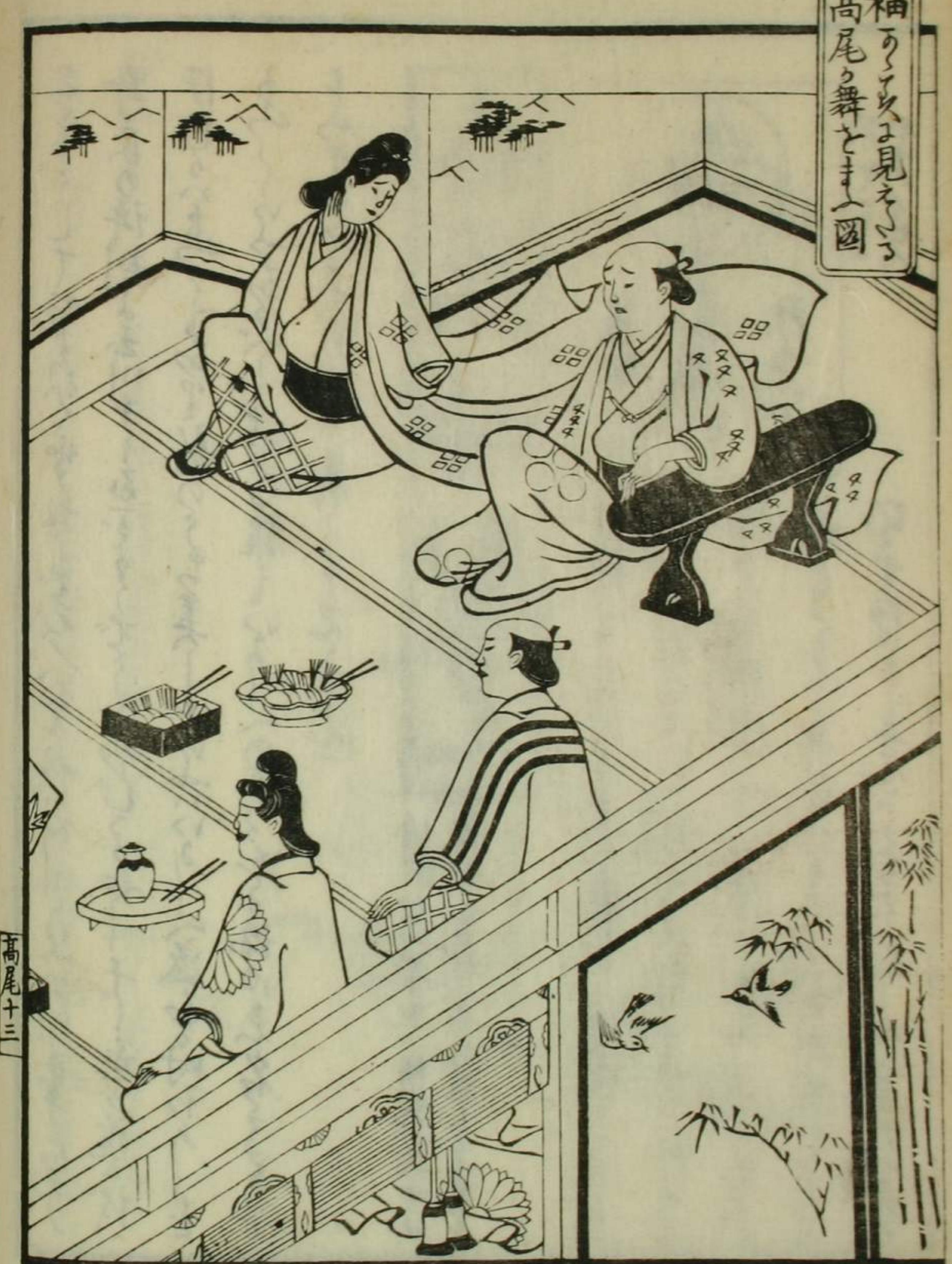
梓形の年号が 挿 寛文六年
増補へ 寛文八年の後ある証ある
ゆゑてふとぞし

開板吉原よぶこ鳥高尾の紋及秃の名まんてう記

岡松吉原よぶこ鳥高尾の紋及禿の名まんじゅう記の如一。やアモモカヒと
あり「油目」とも云ふ。アラシヤマウサギの毛色も黒いが、

吉原雀小載
くる高尾の姿画
是之代目也と





と人のまゝを一まれ大事の名中絶まへ

名もえき尾のえの紋のちりぬれやあさのちく川ひめ

以上袖鑑の全文也。讀嘲記ふ。袖鑑曰。引く文見えど。若
寫本のうちよあやし。缺てた高尾の吏をよハ寛文のち。め高

尾の名を継子頃よ書へずふゆえある。がうややくその名字にて記

下のとおりとしまへばやつてきて發行の冊子ともあります。ゆゑに根元記

より前ふ出まへと思ひ
其の後は未だ見ゆ
寬文八年の後なり証卷中少く
其古文、薄雲考ふいづ

因云
俳諧是天道 延寶八年印本
高政獨吟

前より
まゆのたの花の御はりとよ

附内 あらわす方を埋め込み下の紙に

元日高尾の吉又といひ此今まとの吉又可考矣、昔高尾

とある。故延宝の喰あきらめること引ひげて錄と

當時三代目高尾出廓あれども不詳

當時四代目高尾出来——すこやまくわいど是又不詳

四代目

關板
吉原大雜書



高旌

京町二浦内

此君許へ曰まもが、尾とか、アマムシモセアの浮名をと取
あまモゼアトモ、萬葉は御の字、アマムシモセアのよ、アマムシモセアの
死ニモモヤトツモゼトヤキテ名をとす、モゼトヤキモモリ丸裸、
曰紫と名を付、又三浦わ、一、名をあるせ、も書、もアのカヒ

ひが事あやめくあぢうへやしとてあもみめりて
そよぎまふゆなへと徳善へとあつてよ紀世累の國とむす
事よむわどくらむきどくを父形ふ異あどどくば
ああうちの尾へ毛すまね青机あれど盛の紅葉の色をまた
まとめてけづる名とへんをせられどす爾のぬきはくはくとく
きゆゑあらびまきあけの薄紅葉はぐらはまくはまく
とてき尾へいひへやまくす子がひきにや

とのふと考へる。三代目高尾は今年廿歳なりありて、それとされて、若竹のよがれをあらわす。又、尾は色さまを相あらざる。ありひき思ひあれ。されば代目高尾の近年出来し、更此文をぞ知らる。

又曰此翌年刊行の
まづめ石 小高尾を許して今ハ年けみひ
てどりとぞまずて、前後の双紙合本をあれ考へ
予まづめ石と未見

あくよ載るハ菱川の画本
鯉釣針の頭書あり梓彫の
年号い不知れど天和元年
京極直段附書目錄又載
此が延室中の双紙あり論無
故ふくよをもれど當時の
吏とく白地よりすと恐く
公の手を産一高尾ハ三代目
あべ彼嵩尾と三丸高尾
と云々吏下ふあり若きの客
の名十二郎と云ふし次
延宝三年印本吉原失墮不
十郎左門と云ふ名と隠九一
と書くる例も有るが其もて
如此思より

箕山大鑑 小此高尾の傳あやと聞り此書延宝六年の淨書を
 きハ平産ちうひれど前明証あれど江戸小傳ちうひ闕卷
 本すて予ハさる事ある冊を見む又案よ此産一子ハ女子之
 俳諧點者評判花見車元禄十五年卯立志の條「皆も尾まゝの腹
 侍爪の子とまゝけんしもとこち取て巻されどが浪人の後才
 と裏おもて高尾の勤めやそれより河内まで女郎二代ありとゞ
 きちも二代の勤めといふ事にまへ高尾が子を産一事虚説たり
 べく前より如く三代目高尾あらぶ寛文末の事かべし作者不
 知高尾考小元禄年間の高尾とあらひ誤りやゝ事論ナ



画本鯉の鉤針

前ふ錄くろハ此画本の
頭書すくじ

揚屋葛籠くら産
龍りゆうと画人
の洒落見さくらくみタベ

此年間小吉原芥川といふ草紙閑板高尾の評の中ふ方年曆と
ある前引大雜書の事トシ都鳥と隠名をもる作者何
なる故う高尾を悪ミハたりの事考へ事あく闕丁本
を見てうづき事ある故ト錄せど

吉原山茶本草

一枚
摺

名寄魚之部一扇屋初山金一東屋吉田

一丁字屋す一郎サトウ一三浦屋たかとう一中村屋夕霧

と並べ出せう此高尾タカオ事トシ大雜書の
文文トシ知らざれ故あまふ壁言タクヒン此一枚摺ハその書抜款又一枚摺ハ其

前款未考

天和元

吉原下職原

三月の刻本を改元前をもじ延宝九年と巻尾小町で

大上身正市威 太夫 高尾

元來些官三浦屋ふねり相續の官之代の高尾其の名をもれ
如かれば此城ふ任をもる事か。元高尾てんよもくちん。ニ九そく尾。

高尾十七

今のか尾ふねりすてててててて
あるが、ちつよ世俗のくがん残
もくもくの評判をかこみての
票奉りてゐるあき事はよます
ひらちよ其の事はよびあひが
まよづくすをとててててててて
だ、多くともとよぞ情の道すと
あひがねふとあゆきの者いなせ
きて就しむ事すそれが其の事初
す。教ふまうもとよとがす。且
ふねとまく死とよとがす。且
ハ度生君よのまく其の下にあひ



。神ぞくわりと教でいありて君の情ふ何令あら

柳翁曰こにて元高雄ハ元吉原ニ轉譽妙身ハ方治也。三九高雄ハ寛文也。此今高尾四代目ホテ大雜書の高尾と同人多事明ニ高尾とリ
延宝元年よりの勤とするとき九年目キテ此草紙上木サ一項のこと
をもと此高尾出廓ノトガタ最着き振袖の高尾出来リ

代々小不筈高雄

吉原買物之調の卷尾下左の如くあり

高雄評

仕ハタ本とおもむとありありはとてけん
誠緒の書れまくらひ。生くよぐしまくま
桃の二紫叶くる尾を縫ゆすけやめかふ

高尾十八

思案ま遠ひあんそ一物秋のす向るま
のりみちわき わけのすじくんすといひ
人ありてこのはやくあるじゆひとも
けゑとをとふ車よおくすきぬふからうす
海うくふのめへとく紹よあひくねくわく

此草紙例の梓形の年号無し卷中下職原の作者小近頃沛
ひのとあれがやつてその發行みて天和二年あると其

故此書も第一小紫が太夫う格子下りする事を嘲る文小

買物

肉みじき秋おも入る尼衣を拂ぬくに御處處ゆ
川を、おれを東町三條内こもくまにとて御處處もくは
まとと皮とてくわひまくしてぬくうふもありヤーけられ
つてうふりあらうづくくいのうふれと西向む

小紫の事と記せば不用ひ似れどこれよりして天和二年と考
へり按ト高尾が袖留ハ天和元年の秋より前の高尾出廓の同
年歟此高尾天和二年の頃夭死す同頃不此惡ミトケ
小紫も出廓へ前ふ刊行の下職原みもさんびよ小紫を
罵ア一事見ゆ

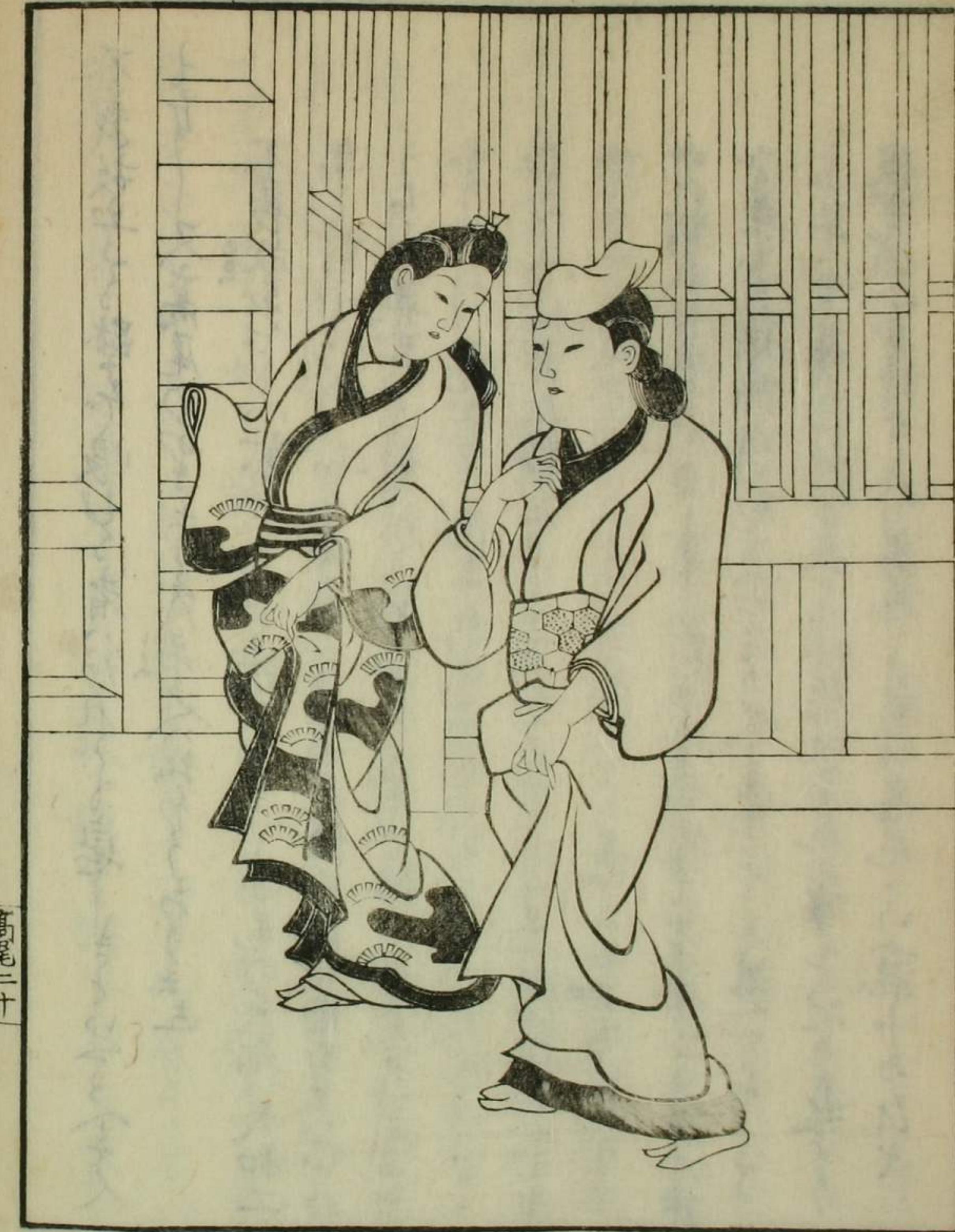
関板吉原大豆俵 小新町三浦隱居内小泉といふ遊女を弟不出し
「左三浦より高尾の君が跡をつゞ小泉の君ハ二番ふうせんち」と
吉原にまみれてまくら尾の紅葉ハ夕の秋風よそぞれにき名寄川
みちる芳野の花の絶て知らむ異國の席もろくとくをとづけば後をゆ
て坐を頭をさすが「然あやしくて小泉の君あくまびむじのす卷
綴ふすをあらあすれ云々又万太夫を許して「高尾が取身と思へば
箱入ふりて並せし」又角町久左門内小若狭を許す詞のうちよ「小紫が

不義故出でる跡を恨む者ばかりと憇きとひとを人
もす又高尾のあきあと後吊人ハねりうわうえ

不義故をとどく小紫とてても謗もとて高尾の夭死ハ天和二
年と前もいひ如く考へテ此高尾僅の間の勤め代々の
うちふゝ筆されど草庵とい吊人多くあすと記すと見せば人ふも
をきり遊女を後年越後高尾といひ是之秋前とばげし
詐のうち不此君越路の雪のまゝある生をとつまゝ彼國の産ふと
ひらぎと風思ひもとす書載ておき是トク廿余年の後宝永
中の寫本吉原ア草上巻小越後高尾ハ道中の度毎小着ふと小袖
を茶庵の娘揚前のかまくらとく是どよとと思ひそぞくろ
とそ世ふ傳けめ下巻す此越後高尾の事とくは是す
後寛保小身請せられ高尾ハ又越後高尾といふ混づひそ



買物調の画中よ高尾の
姿繪見えべ豆俵ハ
さとた高雄後後の
草紙あれバ
あくまき
いれゆ
是ハあくまき
べき画
別幸より摸
添てあり



俳諧虛栗 天和三年其角撰

遊心寺アシニ高雄が廟 アシニ石子榜ヨコサカの萬の根 ム 才丸

去年沒アリる高尾の手向ハシムあアいと遊心寺アシニ何地ナカニ欵不知
再曰紫アメニ一本ヒトツ小高尾コウテイ小紫今アメニとあり此書淨書セイシキ也ヤハ、
天和三年豆俵アマヂカを彫カバると同年アリ前年アヘ高尾沒アリ紫
出廓アシルあれぞく合ハグも

俗アレハ小高尾コウテイ油三ミツとり者トドケル請出アシタスルきみび鳴アラシふそび
住アリむとい事アリ此書元祿六年アメニ没アリる西鶴作アシハシ是アリ
是アリ作り物語アリモノガタキ欵若實說アリハシタツツクあア四代目高尾油屋の妻アシヒ
一事アリにアリ吾目高尾の出廓アシルハ西鶴アシハシが沒アリと同年頃アリ

○一枚摺吉原細見之圖の事

萬治年間アリ細見アリ一枚の吉原圖アリとアリ未見アリ

高尾廿一

貞享元
二
三
四

閑板

吉原源氏五年署

小高尾無此草紙其角著自華半彫

画アリ菱川師宣遊女評書アリ中の絶作アリ去年アヘ高
尾アリあアいと其尊アリとアリ無アリ見アリ五
年アリの間高尾の名中絶アリとアリ其故アリ
高尾アリとアリ知アリ可考アリ

ハ次小記モ

五代目

元禄元

細見の圖

は高尾なり是ハ新彫トもあれバ証と申シ

吉原幕揃

小高尾あり此草紙前記一、吉原芥川の外題

直一と見ゆれば評の詞を當時の高尾の事より取がれ
ども當時高尾のあらへ故ふ古板を取りて物あれ
今年高尾あり証といもぐ

新刻細見の圖

小高尾無此高尾元禄元年より五年程の勤怠べ

関板吉原草摺引

一の卷小

太丈

立雄 りうのぼるゆま

き志せじそもじもぞといひどりそとよとまやくふをあらぢま

三浦は鑑

はやまをの山からすとあまれぬおまきとせ君の密よりて
酒をすふもとむ配されよ落汲みせうとよきごまひくわや
のまくらひすり古紙かくのり肉身若狭よせまの事づま
みくらひすり古紙かくのり肉身若狭よせまの事づま
より掛けばけよせん達のよしむすすみよせくいとおとふ
の事づま方すよせまのよしむすくわせじねあゆの時づ
えかせらぬ深澤の胸おりよりなぐれぬ知らぬ事のよしむ
よしむの事づまとほほせよしむの事づまとほほせよしむ
よしむの事づまとほほせよしむの事づまとほほせよしむ

是五代目高尾出廓考後少其傳を書

同書

と詳を詞小ま君いする若一中略すと高尾がおら行は
いさう薄雲貞のよしう今ふもくもんねば云と見え。太夫
今薄雲格子今小紫とひりて今高尾とあられ六代目はまく出来ま

此後宝永正徳までい画風今様ふうづり古雅と美ひてせしきのば摸すだ

入紙

吉原の草挽き

ういてれみにぢら
ゆきよしめあくま



此草紙全五冊開板の後
故あきて十余年の間遊
女の囃を書く草紙出
板絶えりゆきよし元禄十
六年小吉原百人一首と題
せる冊子なりと考証と
まとまること



又云
如此の拙画
作も又
みゆじよ

六代目

六代目高尾の出来——年考——
ご便あ——

奥村政信筆 吉原遊女の姿繪

不知題

の折本の遊女の數廿人

幕末より春日野巻尾遺稿、雲巖六角高尾與書、正徳元年と記す或人の
詰尔此年号ハ後ハ彌改メ之原板ハ元禄十四歳辛巳ト仰リト予思
小若當時元禄辛巳年若き故卷頭卷軸ハ載ナリシ欽

宝永元

開板



寶永二酉春
圖工
石河流宣

宝永年間の寫本
吉原づれく草小西條す。尾がわ方をもりてまづう
あらむと云ふ事なり。又代目高尾のすれに聞ゆ。西雀ハ油ニ又妙心高
尾云。かど見されど其文を錄て考ぎき事。や。越後高
尾の事ハ

卷之三

前記も再曰此書其角の作どりハ誤あり其証。書中大錢どり事二所までづれば宝永五年の後よりあれ、草紙之其角ハ宝永四年二月廿九日より没す。又此書七十二段よりは後も大磯の生女ゆのうりとてつりて、十石乃至一石の款付との沙汰をことり、寶永四年十一月の事あり其角の没する三月。此二條ともて角が作あらざる事明あり

閑板 吉原大黒舞

高 雄 太 夫

里と柳町より西へ繁昌の寺とある。よりも山本が吉野
三浦が三浦尾とて方人足を志のび今吉本より下りて
も尾の名代々續き。代の後胤、三浦のみ。雄とて多
い。知るべし。里より一處出當寺の有者あり。云々

正徳元

七代目宝永七年秋正徳元年秋六代目出廓の間もあく出来

七代目

僅のうちの勤ゆく正徳三年退廊 病死の噂あきと身請

開板 吉原七福神 小左の如く高尾と弟一小出を

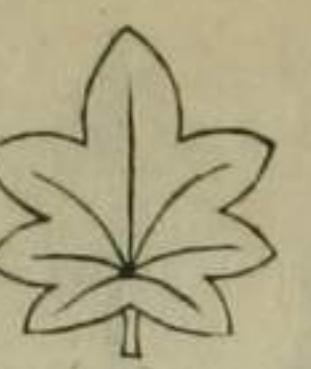
高尾太夫 三浦四郎左衛門内

そもそも高尾の傾城とやスハ中略 柳町と取てエ津和揚屋の名とけり。初年の名もき女郎より山本の豊野三浦のす。尾といふれど花紅葉の色を以ててあらめ暦の後新吉不ふうされば金龍山の花よあれ角川の月よこに通ひ人絶ぞ。中略今高尾ふくらみで七代の毛ぼく紅葉の系すくび中略東夷小秋の族よほ君とおどとよ事か」といふ又次の年正徳年春再此七福神の草紙と摺する高尾の名を削るの跡へ花魁と出一末のとどうと左の如く彫改めり。

高尾世五

遇頃高尾廊と出ゆるも繼き明女ちよ花魁の君あつてぞえくびゆく座上とぞきとゆり是七代目正徳二年出廊の証とモドロ又同年五月發行の

吉原えり 染ふくは高尾あす



三浦四郎左衛門

高尾

虎

△位あつてたあが守難敷極てアタマ
たアラハ佐ほのまほへは里の一堂一軒
のゑあれを仰きて云ふ事あし

此を高尾病死後、稿場正光寺紅葉の塚もじの支あり全江戸廢子ふきて書と見ゆればちううつむ

近曾出来一高尾の事をつゞく聞えど按ふ是ハ去年高尾あく前よ書をきと改めぞ形よ歎又高尾あくと
田舎をど草紙の賣ざ故のまさら歎七福神ハ去年發取あひと

今年の新板と思えんとて彫改めし物と見ゆれバ高尾さまに
退廓アラシ事必せり是凡例より用捨スル之を染スルと見て
七福神セブンブツジンを用ふぞ承欵

七福神を用ひまく

五
八代目
今年高尾出来たり其事下記
山東屋
志の

此萬尾初興州の堯
志のよ

五
閑板
吉原丸鑑
小

極上之吉 ちきゅう
定紋丸ノ内机の葉

そもく是ハ元祖する尾より九代の後胤をすまか名とおのよきよ
はまきの奥州といひ、君よつまそひひふ徳五年(1576)にて太
夫の位よそむきりゐ中略傳奉よさうきをして音曲たゞひあひと
之と名訓あす相方よししきれば聞きよまわ中略此里ふニま余人
の色あひとどゞき尾と名する君八代不すてもざれま美人よわら

されば名を繼事あらざれば里寺のをまとわぬれどやとゆ
八代とせざり前後の草紙小合を考へて此丸鑑の作者ハ
天和小天死^{ヨリ}。高尾と加へ九代と記^{シテ}。又
丸鑑の本小高尾の條を削^{ハグ}。又年号^ノ闕^{クル}。あヤマサレバ
此草紙出板の程^{アリ}。八代目高尾ハ退廓欽校正ともき
雙紙と見^シ。九代目高尾の出来^{シム}。是又詳^{アリ}。左
繫情菖蒲草^写。本小高尾^ノ用^ミの多前ふ利休も茶抄を授^ス。事^ニ
代目此標目^ヲうとよ記^シ。左^ノ摸^ス。細見記の
高尾ハ八代目歟九代目欽考^ヘ得難^シ。

閔叔子文集



を丈 さう尾 ませ
かじとく えさき 市川 ときの磯の風
あふもうち川 小豆と 小よし 小豆 お川 やも
あふさうをまう きとく いすよ 鶴羽 うちせも
立風まつえ いのくめ あらう すよ
上りれどよ さきを こうせ 大まと ほな

馬喰町
四町目
中村屋板

そレ、是ハ元祖高尾より十代の後胤也。其名をもづやといひ今
揚巻の君の枝葉ふくく享保十八年よりの勤よて太夫の位ふ備り
ゆ程あれば諸藝ひす不及中略酒も少しありていそん處あふ。歌ひも
哉好いよつぢの花の吏あればあまべー高尾代々の吏跡凡のみ
えふ。染ふくべーそれがむらーはるとなり享保十八年とむは廿年の
書誤あうと先達の説既より同刻三文字屋板細見くわいすも高尾あり。

細見記三改松名寄歌仙の第一よ



高尾

三之内

高尾

此細見ハ

鱗形屋板

序小「書初ヤトテアキラ嘘始ヒキテ」の高尾の歳旦。
さすがの君の年を下めと合歡堂も賞美しめとなり元文
より昔といひ沾徳が讚へとひれバ元禄頃の高尾の句あるべー

高尾也

同年標題を吉原見物左門とよづ俳書アリ是ハ吉原の遊女

の名を題として千七百七十五年不角門人封兩堂頂角獨吟

京町右多大三浦や内

高尾

名すもよこすの尾の君や多き紅葉

春江戸町夏二丁目秋角町を京町新町と月花とおもふ

かゝる事のおこあむれゆゑ細見記す。名寄歌仙と載るあまべー

細見記菜の花

小高尾なり

細見記標題不知

小高雄あり

年々く名の絶一薄雲
言三日より出まとと記す

寛保元

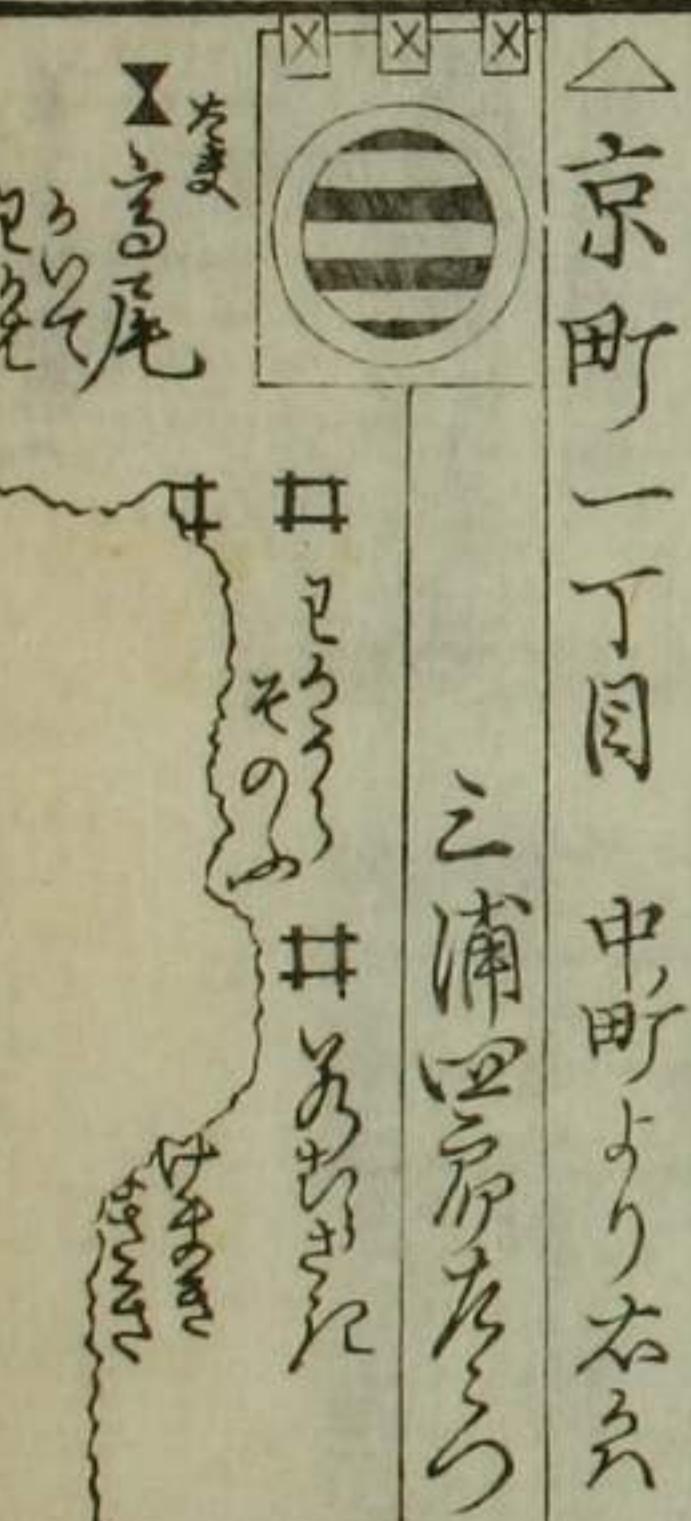
細見記鶯の思羽

△京町一丁目

中町より右へ
之浦四房をもつ

如此寛保元年

まで高尾あり



五
四

三

春
細見記
里康子

里康子

卷之三

△ 京町一丁目
町より右言
△ 深四石丸

まきを
くも雲
あつまち
さんさん
すまきの
ひと
せうく
ふくよ
うゆよ
さのすれ
かせらへ
まち
みどり
うまれ
まち
ひと
せうく
ふくよ
うゆよ
さのすれ
かせらへ

大傳馬町三丁目
山岸屋九左衛門板

山翠屋九左乘～极

如此高尾の名闕て無し前年
寛保六月身請と先達の説
なり予按ふ元文五年より此
身請の沙汰あらへゆゑ云々
四郎左門太夫の絶人事を思ひ
さるゝ遊女を見みて薄雲の
名と継がせりまべ
此身請の事前書ふゆくじ
く見えり

○玉屋高尾

以下、唯年々の細見記の標題のみがあげ、他の引書は
省略。昔、細見記の板元多くあるとて一年のうち四本
五本出板も多う古文あれど日之よりはるかに最も

寛保三年	外題不知	延享元	胃	飛鳥川	山本	二	外題不知	鱗形	品定之
秋袖見臺	十	五色住	俳諧五色墨流行の頃	揚屋清十郎の家	今年まであり	以上高尾も	外題不知	屋板	同上
し欽	三	寅春	トモラガタ	同春	羨里	ヤト	外題不知	板	外題不知
里の家名記	二	春	かづろ松	山本	四	春秋	外題不知	板	外題不知
原序ふ伊勢	四	袂の花	宝曆元	春	吉原繪合	カ	外題不知	板	外題不知
の変あり	五	多智姿	吉原繪合	吉原燕	トトシ	吉原燕	外題不知	板	外題不知
ひ	六	入相の花	吉原燕	吉原燕	トトシ	吉原燕	外題不知	板	外題不知
欽	七	秋紋盡	隨筆用捨箱	沈香記	宋	沈香記	外題不知	板	外題不知
ひ	八	秋紋盡	トモラガタと題せ	沈香記	宋	沈香記	外題不知	板	外題不知
秋袖見臺	九	花橘	支予う	沈香記	宋	沈香記	外題不知	板	外題不知
秋袖見臺	十	五色住	行の頃	高尾も	以上	高尾も	外題不知	板	外題不知

寶曆十一年辛巳

初春叢跋

細見記初綠 高尾あ

玉屋山三郎にて太夫花紫を三月より出でて記す

同年秋刻

細見記實語教

九十枚
太夫引船入

高尾もつた

玉屋山三郎

とあひて次の年宝曆。春刻

道中巣子陸

秋

里の地清

二本とす

ふ高尾見をば是ハ故あひて出る間程を名を改やへまつとぞ

柳亭種彦補綴

高尾年代記畢

高尾

高尾三十

いふへんじる事のゆゑ故人を弔ひんとももふ
ほひ其好めかひきよくもあひてよはるよ、差しと
や師翁世よ、まきうりし日著述を身の樂と
な骨董小思ひを耽ら、もひきさるゆゑよ嵩
尾考、先輩の編みかづりの小自の考、
加て有り家よ花もあら、が師翁友豊を教
子かひよくあれまじき、翁苦心せむれ
まのじうち小紙奥の極とがらん、本意かど

已考とぞやすて斯様よのうもよひつ
曾て故為此編述あらず 頃豐萩の其菴を訪
り小四塚の由来より玉葉紅葉とて麥白
て毛白とて皆妙身高尾の墳墓也所
古西方寺
谷春慶院初代玉葉の墳墓兩所 新塚端永見寺
淺草光感寺あり忽
ふづれり埋葬の地と先達を定められ城
主とは高尾を埋葬の實所は西方寺をもんとい大方

説とひき高尾を埋葬の實所は西方寺をもんとい大方

おまめみりと玉葉を墳いましにまよひ
おもむかたよ家塚の由來を尋ねて定め其
身を新しき塚のゆきとせむわきとは旦これ等
を考へれ餘材は高尾をおも家を薄雲を
代へきよひよさんあく己等は吉雲を事あら
タとされ今は一卷を継く其考へりとモル玉
葉を埋葬の實所をよくさん薄雲を代へき

を窺ふとともに管より大室を見下す。時學ひよ
りて、さきはん葉枯く年あつて、もぞれ葉を拾ひ
とぞももとぞひのじあき、身ふねよへくわくく友人
同門の力とよそむかう外へあじとつあらへ、まじおこ
ちよんじうづけかすあまとねすねて思ひれぬ
じよそく好めふるをもばらうりふせん

遺弟

嘉永己酉仲秋 柳下亭種貞識

四月史稿

東都事あら年舊を博上す一也、
大程を やす野すと、

